

建具の町 田鶴浜

岡野 繁

聞き手・中瀬莉菜 藤原光里（石川県立七尾高等学校1年）

自己紹介

名前は岡野繁といいます。昭和30年3月21日生まれの57歳です。建具師をやっています。七尾市、田鶴浜町の生まれであり、育ちです。家族は、今は家内と2人暮らしですね。私は男ばかりの4人兄弟の長男です。そして私の子供は3人姉妹で女の子ばかりです。建具は見習から入りまして、今があります。高校は建具を習いながら、仕事は5時に終わり、授業と部活動をおこなって、帰りは最終電車という生活を4年間過ごしたなあ。



両親

私の父は公務員でした。ほんで、父は「勉強して公務員になればどうや」ということをよく言うた。父に公務員をすすめられとったけど、父を超えたいという気持ちもあり、隣の和尚さんに勧められたこともあって、「よし、技術で父を越そう」と思った。母は4人兄弟でもあり、1人でも就職してくれるればよいということで反対はしませんでした。

弟子入りと修行

多村建具製作所に弟子入りして、3年間修行しました。今

は土日、祭日でお休みはたくさんあるけれど、弟子のときは1日と15日にしか、お休みはなかったな。弟子の仕事は、仕事を習いながら、工場内の清掃や木材を外に出して、積みみして乾かした。約半年乾かし、工場の倉庫に運ぶのも仕事やったな。

田鶴浜建具の特徴

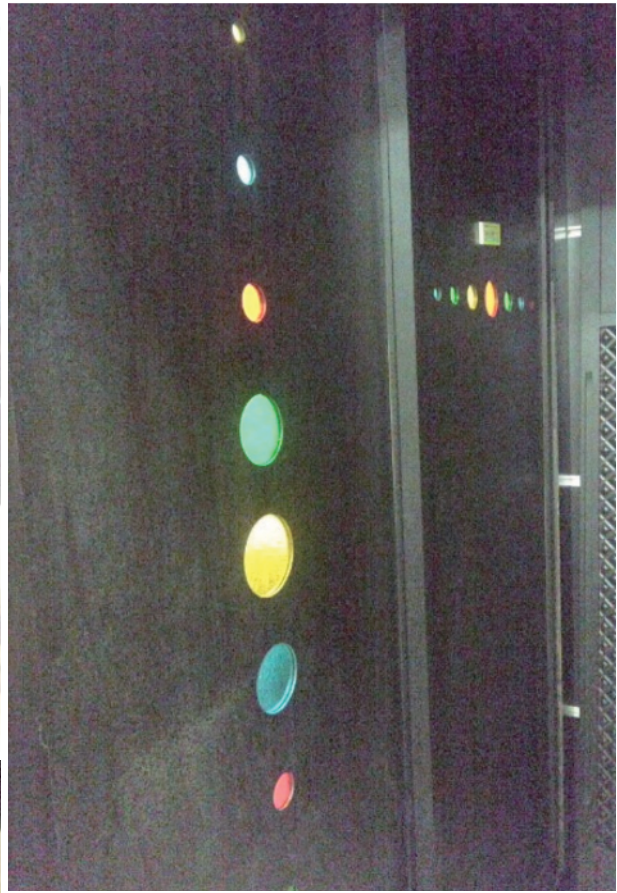
田鶴浜建具の特徴ちゅうがんはね、やはり組子が一番特徴がある。今障子の中でも、色々な細工に仕方があるわけや。細工の中で1つの組子を組み、色々な形が生まれてくる。それが田鶴浜建具の優れているところだと思います。

デザイン

デザインはお客さんに「こんな風で、こんな格好で」と注文を受け、それにあわせてデザインを決めます。つまり、お客様のニーズにあわせて製作ということです。最近では建築設計士さんが希望される建具も製作しています。

建具に使用する木

建具に使用する木は建具材といって、日本にも建具材はあるけれど、主に外国から輸入してくる木が多いわ。カナダ産のスプルス、アメリカ産の米ヒバ、インドネシア産のアガチス、中国産の雲杉などがあるわけやね。例えばアガチスはドアなどに使われ、雲杉は障子関係とかドア・ガラス戸に使われるわ。米ヒバは塗戸に使用されるわ。もちろん日本の木で、青森ヒバは塗りに適していますけど数が少ないです。日本の木は外国の木に比べ、数も少なくコストも割高なんやわ。青森ヒバは品物も良いので、高級建具の製作に使用しとる。



(左上) 丁寧に木を組む岡野氏
 (左下) 次々とモチーフができあがっていく
 (上) 女性の好みを意識してデザインされた建具

作業行程

建具は1日の作業工程でというのは難しいですね。まず注文を受け材料を選び、木取りという作業を始めて、木を削っていく。次に墨を寸法通りにつけて、穴を彫って、ほぞや溝を作る。ほぞは木と木を組み、形を作るものことやね。溝はガラスを入れたり、雪見障子など上がり下がりのための溝です。溝がなかったら戸は閉まりません。他に組子が入ったりしたときは何本入るかを計算したりします。

建具の入れ替え

建具の入れ替えはそんなに大変ではないですね。入れ替え

する間口寸法を測って、希望の枚数を制作していくんやね。またふすまの張り替えを希望されても、できないことがあり、入れ替えに変わることもありますね。

水に強い木たち

ヒノキが一番長くもつし、水に強い。だから桶によく使われるんやね。桶にはサワラもよく使われるわけやけども、サワラもやはり水に強い。他に青森ヒバ、能登ヒバも水に強いんやわ。

絵をつくる

絵をつくるということはマスの中に組手（くで）と呼ばれ

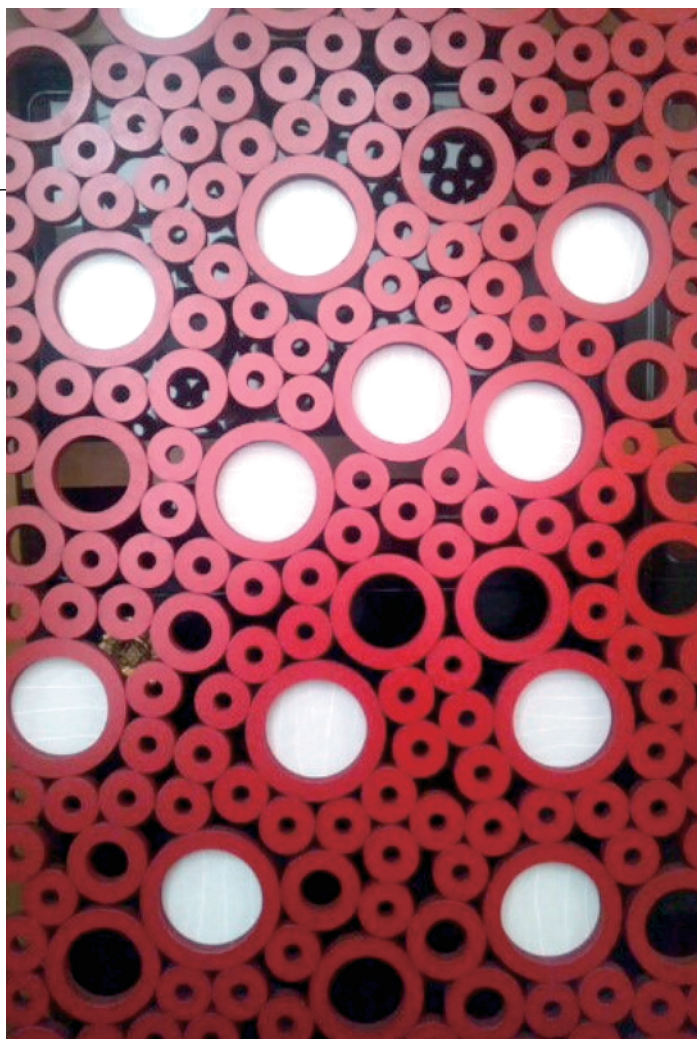
るものを組み込んでいき、木のもつ特徴を生かし、色々な種類の木材を使い、描いていく。使われる材料は神代杉、他にヒノキや秋田杉、青森ヒバ、能登ヒバ、ホウの木、外材なんかやね。

測るための機械・手法

昔は尺の差しで幅、高さの寸法を測り、コンパスで角度を割り出し、組子の間隔を決めていたんだけど、今は条件を打ち込めば角度が決まって、割り出しもきっちりとしてくれるコンピューターの機械があるんですわ。

伝統的技術とお客様の求めるものの折り合い

これからは建具だけでなく、人の希望する品物を作ってかないとならんわけやね。そのためにはいろんなところに見学に行ったり、高級デパートや安い店などに行き、お客さんが



新しいデザインの建具

何を求めているのかを学習することも大切やな。今、屏風や行燈、衝立、コースターなどもその試みの一つやわ。田鶴浜建具は360年の伝統の技術であるからには田鶴浜建具のPRなんかをいっていかんといけんわね。

建具の修理

建具は30年あまりもつんですけども、建具が動かなくなったり、動きにくい直してくれというようなことを言われます。家というのは瓦がのったり、雪が積もったりと、屋根から重みがかかり戸が動かなくなりますんで、少し削ってあげると動きがよくなるんですわ。また戸車がへり動かない場合は戸車を替えるんやね。

これからは女性ターゲット

今までは純和風の家で、ふすまや障子が多かってんわ。家内にも光が少ないんが当たり前であって、男性向けの風格があったわけやね。これからは男性より女性向きの建具を作ろうと思っとる。女性向けにするには明るく色を使ってガラス製品も使うんやね。隣の能登島ガラス工房さんとのコラボもしていこうとも考えとるんやわ。

伝統の継承

全国大会に向けて作った建具を後継者や人に見てもらうことが一番大事やね。後継者ばかりでなく、お客さんにも見せていただいて、組子の建具やケヤキの一枚板の帯戸なんかの自慢のできる建具を入れてもらって、口コミなどで田鶴浜の高級建具が広められていけばいいと考えるわけやね。

これからの建具産業

このままでは、建具業界はダメや。やはり住宅嗜好が変わってきとる。ほとんどの住宅は壁で仕切られ、引き戸は無く、ドアがほとんどなんやわ。これからは建具の入れ替えが主であると思うし、それ以外に建具以外のものも考えることも大切やね。

まとめ

苦勞を惜しまず取り組んでいけば芽が出てくるわいね。日本の国はものづくりや木から始まった国ですから、ものをつくらないと日本の国は生きてゆけんわ。我々建具屋も得意分野があり、得意分野を生かし、ものづくりをしていこうと思います。

※田鶴浜建具…田鶴浜建具は、1650年に長連龍の菩提寺を建設するために尾張から2人の建具師が呼ばれ、田鶴浜に住みついた事から始まる。繊細な構図、精巧な細工が特徴で、書院障子など、美的鑑賞に堪える建具を生産している。

※ほぞ…木材を接合するための突起。

※クデ…材相互に欠込みやほぞ取りをして組み合わせて接合する仕口。

PROFILE

岡野 繁 おかの しげる
昭和30年3月21日生・57歳
建具製造業（田鶴浜建具）

石川県田鶴浜町に生まれ、育つ。昭和45年、多村建具製作所に就職する。昭和60年、岡野建具工芸を設立し、現在に至る。平成6年にはTV時代劇「水戸黄門」にて組子の実演を行い、平成7年には紀宮様が建具センター御来館時に、組子の製作実演を行った。平成14年には全国技能士会連合会長賞（猫間障子）を受賞。平成19年より田鶴浜建具組合理事長、石川県建具協同組合副理事長を務める。地域の子供たちへの伝統工芸教育の実施など地域活動も積極的に行っている。



● 取材を終えての感想 ●

この研修に参加して能登についての知識を深めることができました。

はじめは私が岡野さんにインタビューすることなどできるかなと、とても緊張していました。しかし研修でしっかりとインタビューの仕方について学ぶことができたことにより自信を持ってました。岡野さんはとても優しく、安心してインタビューすることができました。

私が一番驚いたのは、岡野さんがコマーシャルを研究し、新しい建具のあり方について探っているということです。「良さを残すために変わる」これは、とても素敵なことだなと思いました。そしてこの研修を終えた後、私の中に、能登の秘められた魅力を世界に発信したいと言う気持ちが芽生えました。能登の魅力に気づかせてくれた岡野さんと、この研修に感謝の気持ちでいっぱいです。

「能登の里山里海人」聞き書き研修を通して、たくさんのことを学ぶことができました。

岡野さんはとても優しい方で、緊張しながらも落ち着いてインタビューすることができました。本当にありがとうございました。岡野さんのおかげで建具のことだけでなく、いろいろなことを学ぶことができました。嫌なことがあっても前向きに、目標に向かって頑張ることや人と人のつながりの大切さを学ぶことができました。

この体験を通して、自分の知らなかった能登の良いところを知ることができたのでよかったです。能登の良いところをこれからも大切にしていき、いろいろな人に伝えていきたいと思いました。これからも、もっとまわりの人たちとの関係を大切にしていきたいと思います。本当にありがとうございました。

(中瀬莉奈 写真：右)

私はこの体験をして、大切なことを2つ学びました。

1つ目は、田鶴浜建具の美しさ・素晴らしさです。私は初め建具についてあまり詳しくありませんでした。しかし、岡野さんのお話を聞きじっくり友人と話し合ううちに、進化し続ける建具の良さと、和の空間に溶け込むその調和に惹かれていきました。近代に合わせ、多彩な色ガラスと組み合わせた戸や、さまざまな正方形を駆使した引き戸。私はそのどれもに驚き、とても興味を持ちました。

2つ目は、人との繋がりで。体験を通して多くの人と話し、友人を作ったり親睦を深めることができました。さまざまな人と意見を交換し、討論し、まとめ、発表をすることで私には無いもの見方や視点を学ぶことができました。

さらに多くの事に興味を持ち、自分の町の素晴らしさを知り、多くの人に伝えていきたいです。

(藤原光里 写真：左)